

毎日新聞社

定本
高濱虛子全集

第二卷

俳句集二

〈編集委員〉

高濱 年尾
福田 清人
深川 正一郎
松井 利彦
山本 健吉

定本 高濱虚子全集

第二卷 俳句集(一)

印刷 昭和四十八年十一月十日

発行 昭和四十八年十一月二十日

著者 高濱虚子

編集人 浜田 疏司

発行人 朝居 正彦

装幀 熊谷 博人

題字 矢萩 春恵

発行所 毎日新聞社

100 東京都千代田区一ツ橋
530 大阪市北区堂島上
802 北九州市小倉区紺屋町
450 名古屋市中区堀内町

印刷所 図書印刷

製本所 大口製本

第二卷 俳句集
(二) 目次

五百五十句	七
五百五十句時代	一〇五
六百句	一四二
六百句時代	二〇九

日本派句會稿・虛子ほか選句稿……………三七

解題……………松井利彦……………四六

解説……………高濱年尾……………四七

第二卷
俳句集
(二)

凡 例

一、句集『五百五十句』、『六百句』、岩波文庫本『虛子句集』所収の「五百五十句時代」、「六百句時代」を底本とし一巻とした。それは、これらの句集が虚子自選であることによる。

一、各句には底本句形の初出である雑誌名、新聞紙名、単行本名を記し、刊行年月を算用数字で示した。

一、句形の異同は初出雑誌、新聞、単行本『句日記』、創元社版『定本虚子全集』、創元文庫『虚子自選句集』四冊、『虚子秀句』、岩波文庫『虚子句集』、『現代俳句文學全集 高濱虚子集』、角川文庫本『五百句・五百五十句・六百句』『小諸百句』によつて校訂し、小字を以て傍に記した。定稿（大字）の誤りは註で明示した。異形句（小字の誤りについては、解題（四四六頁）で正誤を示した。

一、詞書については『五百五十句』、『六百句』はそのままの体裁とし、『五百五十句時代』、『六百句時代』の前書もそのままにした。ただし、『五百五十句時代』、『六百句時代』の句で、「ホトトギス」の「句日記」に詞書を付しているものは、『五百五十句』、『六百句』と同じ体裁で付記した。また、単行本『句日記』との詞書の異同のある場合は註記した。

一、『五百五十句時代』、『六百句時代』の句で『五百五十句』、『六百句』と重複するものは省略した。また、配列については、『五百五十句時代』、『六百句時代』が季題別であつたのを制作年代順に改め、全体の体裁を統一した。

一、「ホトトギス」の紀行文、吟行記、句会報などが作品発表と同じ月にあり、文中の俳句が句形を異にする場合のみ文章の「題名」を記した。

一、この他では、虚子自筆書き入れ本、その他で訂正の箇所は、その旨註記し、明らかにした。

五百五十句

自 昭和十一年
至 昭和十五年

序

曩にホトトギス五百號を記念する爲に改造社から「五百句」と云ふ書物を出した。これは私が俳句を作りはじめた明治二十四五年頃から昭和十年までの中から五百句を選んだものであつた。先頃櫻井書店から何か私の書物を出版したいとの事であつたので、ホトトギスが五百五十號になつた記念に、その後の私の句の中から五百五十句を選び出してそれを出版して見ようかと思ひ立つた。思ひ立つてから大分日がたつた。この月出てゐるホトトギスは五百六十一號になつてゐる。それはどうでもいゝとして、昭和十一年から昭和十五年まで約六年間の間に五百五十句を選んだのであるから、前の「五百句」の約四十五年の間の句の中から五百句を選んだのに比較して見て少し精粗の別が無いでも無いが、要するに記念の爲の出版であつて、その他の事は格別嚴密に考へる必要も無いのである。「五百五十句」と云ふ書物の名にしたけれども五百七十八句になつたかと思ふ。それも嚴密に考へる必要は無いのである。

私は本年古稀である。自ら古稀の記念ともなつたわけである。

昭和十八年五月十九日
鎌倉草庵にて

註 改造社發行拙著「五百句」の百六十一頁「天ノ川」の句は取消す。

高濱虚子

昭和十一年

鴨の中の一つの鴨を見てゐたり

鴨の中一つの鴨を見てゐたり

一月二日。武藏大澤淨光寺。旭川歡迎會。

枯れ果てしものの中なる藤袴

枯れ果てしものの中なる藤袴

一月四日。百花園偶會。水竹居、あふひ、花蓑、實花。

物賣も佇む人も神の春

一月五日。武藏野探勝會。目黒不動、大國家。

枯荻に添ひ立てば我幽なり

一月八日。謠俳句會。百花園。

「ホトトギス」昭12・1

「五百五十句時代」

「五百五十句」

「ホトトギス」昭12・1

「ホトトギス」昭11・3

「ホトトギス」昭12・1

澁引きしごと喉強し寒稽古

「ホトトギス」昭12・1

好。一月十八日。谷中本行寺。播磨屋一門、水竹居、たけし、立子、秀

古綿子著のみ著のまゝ鹿島立

古布衣著のみ著のまゝ鹿島立

「ホトトギス」昭11・4
「ホトトギス」昭11・4
「虚子航路」

二月十六日。楠窓東道の下に、韋子を伴ひ渡佛の途に上る。午後三時横濱解纜箱根丸にて。(以下、特別の附記なきものは、すべて箱根丸船中吟)

我心春潮にありいざ行かむ

二月十九日。神戸碇泊。花隈、吟松亭、關西同人句會に列席。

「ホトトギス」昭11・4

日本を去るにのぞみて梅十句

二月二十一日。朝、門司著。萍子招宴、三宜樓。

「ホトトギス」昭11・4

上海の震るゝ波止場後にせり

二月二十六日。箱根丸船中。

「ホトトギス」昭11・5

春潮や窓一杯のローリング

二月二十九日。朝、香港出帆。

「ホトトギス」昭11・5

顔しかめ居る印度人町暑し

「ホトトギス」 昭12・3

著飾りて馬來女の跣足かな
著飾りて馬來女の裸かな

「ホトトギス」 昭12・3
「ホトトギス」 昭11・5

裸なる印度ますらを幸きくあれ
裸なる印度ますらを幸多くあれ

「ホトトギス」 昭12・3
「ホトトギス」 昭11・5

晩涼や火焰樹竝木斯くは行く

「ホトトギス」 昭11・5

三月四日。新嘉坡著。石田敬二、東森たつを來訪。次で三井物産支店長松本季三志夫妻、三菱商事支店長山口勝、宮地秀雄等來船。敬二東道の下に韋子を帶同、一路自動車にて奥田彰坡經營の土乃の護謨園を訪ふ。横光利一同道。歸途タンジョン・カトンの玉川ガーデン、敬二居等に立寄り、今日の吟行地植物園に下車。それより空葉居に一憩、新喜樂にて晚餐。俳句會。

稻妻のするマトラを左舷に見

「ホトトギス」 昭11・4

三月五日。新嘉坡碇泊。日本人共同墓地に二葉亭四迷の墓を弔ふ。敬二、楠密同道。韋子は途中空葉居に下車。歸途敬二居に立寄り歸船。正午出帆。

稻田あり笈あり日本に似たるかな

三月六日。彼南著、上陸。

「ホトトギス」昭11・5

月も無く沙漠暮れ行く心細そ

三月二十一日。午後三時、蘇土入港。陸路カイロに到りメトロポリタン・ホテル一泊。

「玉藻」昭11・6

寶石の大塊のごと春の雲

四月十九日。箱根丸にて楠窓、友次郎と協議の末、米國經由歸朝のことを断念。午後、松岡夫妻、楠窓、町田一等機關士、章子、友次郎等とサンフリースト村に花畑見物。

「玉藻」昭11・7

舟橋を渡れば梨花のゴブレンツ

舟橋を渡れば梨花のゴブレンツ

『渡佛日記』昭11・8
改造社
「玉藻」昭11・7

兩岸の梨花にラインの渡し舟

「玉藻」昭11・7

梨花村の直ぐ上にあり雪の山

四月二十一日。ライン河。

「玉藻」昭11・7

木々の芽や素十住みけん家はどこ

「玉藻」昭11・7

四月二十一日。シユロツス・ホテル、バルコニーよりハイデルベル
ヒの町を望む。

望樓ある山の上まで耕され

「渡佛日記」

「玉藻」昭11・7

四月二十二日。午後一時五分發、車中雜詠選に没頭、夜、伯林著。
三菱商事藤室益三夫妻に迎へられ大和旅館に入る。沿道觸目。

夜話遂に句會となりぬリラの花

「ホトトギス」昭11・8

四月二十四日。藤室夫人東道、日本人の學校參觀、講演。「あけぼ
の」にて晝食。それよりオリムピック敷地一見。カー・デー・ペー
百貨店に立寄り歸宿。大毎社員加藤三之雄來訪。夜、三菱商事支店
長渡邊壽郎邸にて晚餐會。井上代理大使夫妻、孫田日本學會主事、
藤室夫妻等と小句會。

春風や柱像屋根を支へたる

「ホトトギス」昭11・8

四月二十六日。渡邊夫人、藤室夫妻東道、ボツダムに赴く。恰も日
曜日。ボツダム宮殿。

箸で食ふ花の辨當來て見よや

「ホトトギス」昭11・8

四月二十六日。更に櫻の名所ヴェルダーに車を驅る。藤室夫人携ふ
るところの日本辨當を食ふ。群衆怪しみ見る。

國境の驛の兩替遅日かな

四月二十七日。藤室夫妻と再び日本人學校に赴き、日本人會にて晝食。午後一時五十分伊藤夫妻、迪子、バーミング、ビュルガ姉妹、京極、篠原、高田、寺井、昌谷、世良、仙石に送られツオ驛發、獨蘭國境に向ふ。

倫敦の春草を踏む我が草履

倫敦に春草を踏む我が草履

四月二十八日。朝七時前ハーウツチ港著。それより汽車にてリバプール・スツリート・ステーション著。上ノ畑楠窓、八田一朗、松本覺人、横原覺、河西滿薫、有吉義彌、高橋長春、常盤の主人岩崎盛太郎の出迎を受く。それより覺人嚮導の下に楠窓、一朗と倫敦市巾一見、デンマーク街の常盤本店にて休息。タフネルパークロードの常盤別館に入る。駒井權之助、朝日新聞社古垣鐵郎來訪。晚餐を待つ間小句會。

名を書くや春の野茶屋の記名帳

四月三十日。覺人東道、沙翁の誕生地ストラットフォードに向ふ。楠窓、一朗、友次郎、韋子同行。

春の寺パイプオルガン鳴り渡る

オルガンの鳴り渡りたる春の寺

四月三十日。シエクスピア菩提寺。

賣家を買はんかと思ふ春の旅

四月三十日。三時頃シエクスピア菩提寺より歸途に就く。

「ホトトギス」昭11・8

「ホトトギス」昭12・4

「ホトトギス」昭11・8

「ホトトギス」昭11・8

「五百五十句」

「ホトトギス」昭11・8

「ホトトギス」昭11・8